

アジア人留学生を交えた英語授業に関する研究

－英会話トレーニング中の表情と心理に焦点を当てて－

Research on English Language Teaching with Asian Students
－Focus on Facial Expressions and Psychology during English Conversation Training－

森下 朝日[※]
Asahi Morishita[※]

Abstract

Many Japanese and Asian students have difficulty in speaking English. Aiming to develop communication skills even among such students, this study examined the facial expressions of students during English conversation training. When students spoke without being conscious of facial expressions, their faces often stiffened due to nervousness and they were unable to speak confidently. On the other hand, when students were conscious of smiling or imitating their partner's facial expressions, they tended to speak with less resistance and more confidence. These results suggest that it is meaningful to consider the psychological effects of facial expressions on the minds of self and others while conducting communicative activities in English classes.

Keywords : English education, English conversation, psychological effects of facial expressions, willingness to talk, Japanese students and Asian students

1. はじめに

現代日本における英語教育のもつ課題

今日の英語教育において、コミュニケーション力の育成は重要な課題とされている。国際化社会に対応できるだけの実践的な英語運用能力を養うべく、文部科学省（2003）は、コミュニケーション活動を授業の中心に置くことを提言し続けてきた。

しかしながら、日本人の英語学習者には、依然として英語コミュニケーションに心理的抵抗や苦手意識を持つ者が多い。その背景としては、小中高の英語教育が依然として入試対策を優先した読み書き文法主体であり、英語を話す機会が希薄なため、メッセージ伝達への動機づけが低いことが指摘されており（渡邊, 2013）、いざ対人場面で実際に英語を話す段になると、学習者が少なからず不安を抱く傾向がうかがえる。この場合の不安とは、MacIntyre & Gardner（1994）によれば、「話すこと、聞くこと、ひいては第二外国語学習全般に対する緊張感や憂鬱さ」であり、学習過程にマイナスの影

※日本経済大学非常勤講師

響を与えるものとされる。そもそも、日本人学習者は、国語の授業からしてスピーキングを訓練されておらず、ゆえに英語の授業においても大きな声を出すことに戸惑いを感じ、積極的に英語を話そうとしない傾向があり（有本, 2000）、話すことへの不安が、学習者自身の英語コミュニケーション能力に対する自己肯定感を低め（磯田, 2009）、より一層コミュニケーションに消極的になる、という悪循環に陥っているように思われる。

コミュニケーションの非言語的要素に着目した研究の動向

英語コミュニケーションに対するこうした苦手意識を払拭するには、英会話に対する不安を除去し、学習への達成動機を向上させることが必要であろう。瀧澤（2020）は、典型的な言語教育方法論に囚われず、創造的かつ多様な活動を学習者の目線で行うことで苦手意識を克服できると述べているが、実際にはどのようなアプローチが有効なのであろうか。

多角度の視点から検討が進められる中、本研究で注目したのは、コミュニケーションの非言語的要素である。森下（2020）は、話し手の発話意欲は聴き手の表情に強く影響を受けると考え、その関係性を確かめてきた。いわゆるメラビアンの法則で広く知られている通り、コミュニケーションによる情報伝達は、表情や視線、ジェスチャーなどの非言語媒体によるものが55%、音調や抑揚などの準言語によるものが38%とされ、言語そのものを媒体とした情報伝達はメッセージ全体の10%に満たないとされている（Mehrabian, 1968）。その割合の多寡は状況によって変化するものの、非言語要素がコミュニケーションにおいて重要な役割を担うことは確かであり、近年の英語教育においても、この点に着目した研究が活発となってきているように思われる。

川野（2017）は、円滑な英語コミュニケーションを行うにあたり、SMILE（話し手も聞き手も笑顔であること）、FACE TO FACE（目を見て話し、目を見て聞くこと）、GESTURE（ジェスチャーを用いること）、CLEAR VOICE（聞き取りやすい声で話すこと）、ACTIVE LISTENING（あいづちなどの積極的傾聴）の5つのポイントをあげ、非言語的要素の活用の重要性を強く説いている。

村松・野中（2013）は、自信喪失感が強い話者においては、話しながらそのつど聴き手からの表情のフィードバックを得ることで、自身の語りについての手ごたえを確かなものにしやすいと述べ、宇田（2016）は、アイコンタクトや表情、ジェスチャー等に重きを置いたコミュニケーションを意識させたところ、意欲的に話そうとする態度の育成に成果がみられたことを報告している。横山・足立（2021）は、伝えたい英語表現が分からないとき、ジェスチャーや絵を使って何とか工夫するよう促すことで、学習者が英語のやり取りを楽しむことができ、会話持続の方略的能力を向上させることができると主張している。さらに丹後（2021）は、身振りや表情を意識することで自身の表現力に自信を持ち、「相手意識」を養うことができ、かつ聞き手の正しい理解を促すことができると述べ、コミュニケーション能力向上のためには非言語的要素の見直しが不可欠であると強く主張している。

このように、コミュニケーション能力の育成にあたり、非言語要素に着目した試みは増えてきている。ただし、これらの研究は、コミュニケーション素地の完成されていない学童を対象に行われているものが多く、青年期後期の学生を対象とした研究は多くないように思われる。

本研究の目的

まさにこれから社会に出ようとする大学生に、英語に対する苦手意識を克服させ、コミュニケーション能力を獲得させるためには、どのような授業活動が有効なのであろうか。その糸口を探るため、本研究では、英会話における非言語的要素、とりわけ表情表出に着目することにした。英会話の中で、何らかの表情を意識的に表出することで、円滑なコミュニケーションにつながる可能性、ひいては英語力に対する自己肯定感へとフィードバックする可能性が少しでもあれば、今後の英語教育に貢献できるものとする。

2. 研究の方法

対象

日本経済大学において、英語の授業を受講していた10名の学生（日本人5名、ベトナム人4名、ネパール人1名）を対象とした。

初回の授業にて、授業への意欲や自身の英語力について思うところを述べさせたところ、まず、5名の日本人学生は、総じてリスニングとスピーキングに不安を抱いており、英語を使って自由に自己表現することに拒否反応を示した。ただ、いわゆる日本語英語でも一生懸命話せば通じる、と前向きに考えている学生もいた。文法については自信のある者、ない者に分かれた。英会話そのものには興味があり、与えられた課題に真面目に取り組もうとする姿勢が窺えた。4名のベトナム人学生は、総じて文法に不安を抱えていた。発音は洗練されている者もいれば、かなり訛りの強い者もあり、差が大きかった。発音に自信を持たない者は会話に消極的であり、英語での自由な発言は難しいと述べた。ネパール人学生は今回1名のみであったが、皆と学び合おうとする姿勢を持ち、授業に意欲的であった。ただ、日本で英語を使う機会が少なく、母国で覚えた英語の大半を忘れてしまっているという理由から、英会話には難を示した。

こうした学生達の意見や態度から、自由な英会話をさせるにはまだハードルが高いであろう点と、会話内容に違いがあっては表情に焦点を絞ることが困難となる点から、今回は、自由な英会話スタイルではなく、英会話サンプル（井口, 2017）を用いたトレーニングの形式をとることとした。

手続き

トレーニングの流れは以下の通りであった。授業冒頭に短いCNNニュースを流して耳慣らしをさせたのち、聞き取り用の用紙を配り、後述の2パターンいずれかの文脈条件に沿った会話サンプルについてディクテーションを行わせた。全員が完璧に聞き取り、書き取ったところで、単語や文法についての説明を行い、会話内容について十分理解できたのを確認したうえで、会話全文を暗記させた。全員が覚え終わると、ランダムに2人1組のペアを選出し、会話の順番を決めた。順番がきたペアに対し、共に起立して向かい合わせとなった状態で、互いに目を合わせ、しっかりと相手の表情を見ながら会話するよう促した。この際、表情は後述の4パターンのいずれかを表出させた。会話においては、手元の紙は一切見ないこととし、会話が滞ったときのみ若干の助け舟を出すこととした。会話が1ターン終わると、同じペアで役割（A・B）を交替し、同様の手順でもう1ターン繰り返した。会

話が2ターンとも終わると、そのペアは着席し、次のペアに移行した。すべてのペアの会話が終了したところで、全員に質問紙を配布し、記入を促した。

2ターン通しての会話の所要時間は1分半程度、質問紙の記入時間は5分程度であった。なお、学生達の許可を得たうえで、会話風景をスマートフォンで動画撮影した。

条件

本研究にて設定した条件は、会話の文脈（2条件）と互いの表情（4条件）であった。

(1) 文脈条件

- ①ポジティブ文脈：全体的に、喜びや幸福感などの感情を伴う文脈。(Table 1参照)
- ②ネガティブ文脈：全体的に、不安や失望などの感情を伴う文脈。(Table 2参照)

(2) 表情条件

- ①無統制 (natural) 条件：表情を特に意識せず、自身にとって自然な表情で会話する。
- ②無表情 (none) 条件：まっすぐに相手を見つめ、口以外の顔面筋肉を極力動かさず、感情を伴わずに会話する。
- ③笑顔 (smile) 条件：やわらかく頬と口角を上げながら会話する。
- ④同調 (mirror) 条件：相手が眉を寄せれば自分も眉を寄せるというように、相手の表情を模倣しながら会話する。

Table 1. ポジティブ文脈の会話サンプル例

A. Happy birthday, (partner's name)!
B. Thank you.
A. This is a gift for you.
B. Wow, I didn't expect this. Thank you very much.
A. Open it up.
B. Oh, what a beautiful scarf!
A. Do you like it?
B. Yes, very much. I really appreciate it.

(出所) 井口紀子, 2017. 『1から出直し 書き込み式英会話BOOK』, 15頁.

Table 2. ネガティブ文脈の会話サンプル例

<p>A. I didn't get promoted this year. B. I'm sorry to hear that. A. I've been working very hard. B. I know. A. I'm so disappointed. B. I can imagine. A. I'm thinking about changing jobs. B. I understand, but you should think about it carefully.</p>
--

(出所) 井口紀子, 2017. 『1から出直し 書き込み式英会話BOOK』, 31頁.

以上の条件で、ポジティブ文脈につき4表情、ネガティブ文脈につき4表情の計8回の会話トレーニングを行い、そのつど質問紙を回収した。

質問紙

質問紙は、自ペアの会話をふりかえって感じたことについて調査したものであり、質問内容は以下の通りである。なお、質問紙には英語と日本語両方の質問文を記載した。

Q1. 話しやすさ: Were you comfortable talking?

(話しやすかったですか?)

Q2. 受容度: Do you think your partner listened to you properly?

(パートナーはあなたの話をきちんと聴いてくれたと思いますか?)

Q3. 自信度: Did you communicate your words with confidence?

(自信をもって自分の言葉を伝えられましたか?)

Q4. 好感度: Did you have a good impression of your partner?

(パートナーに好感をもてましたか?)

以上の4点について、5: Strongly agree (強くそう思う) 4: Agree (そう思う) 3: Neither (どちらでもない) 2: Disagree (そう思わない) 1: Strongly disagree (強くそう思わない) の5段階でたずねた。

また、最後に自由記述欄をもうけ、会話の感想を、英語もしくは日本語で自由に記述させた。(Please write your feedback in English or Japanese.)

3. 結果

話しやすさの評定平均値

結果をFig 1に示す。被験者内計画の2要因分散分析を行ったところ、文脈と表情の間に有意な交互

作用がみとめられ (F(3,27)=5.721, p= .004, $\eta^2 = .389$)、表情の主効果がみとめられたが (F(3,27)=21.566, p< .001, $\eta^2 = .706$)、文脈の主効果はみとめられなかった (F(1,9) = .618, p= .452, $\eta^2 = .064$)。

Bonferroni法による多重比較を行った結果を記す。全体を通じて、笑顔条件および同調条件と、無統制条件および無表情条件との間に有意な差がみられた (笑顔>無統制; p= .003, 笑顔>無表情; p= .003, 同調>無統制; p= .007, 同調>無表情; p= .002)。笑顔条件と同調条件の平均値に有意な差はみられず、無統制条件と無表情条件の平均値にも有意な差はみられなかった。

このことから、互いに笑顔で話す、もしくは相手の表情に意識的に同調して話すことで、話者は話しやすさを感じるようになる一方で、互いに表情を意識しない、もしくは無表情で会話をした場合、話者は話しにくく感じやすくなることが示唆された。

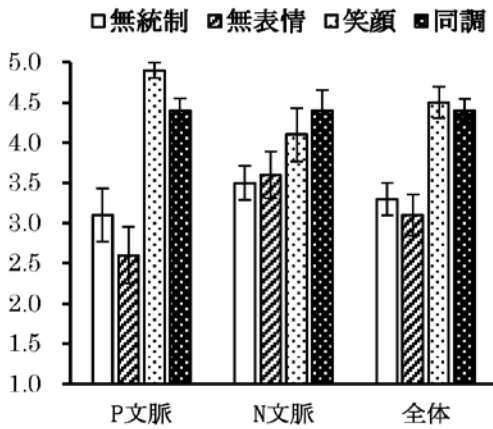


Fig 1. 話しやすさの評定平均値

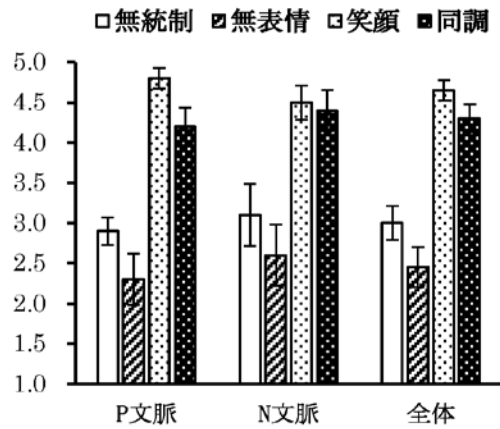


Fig 2. 受容度の評定平均値

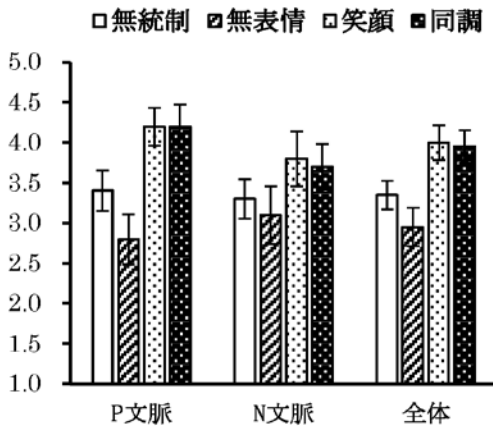


Fig 3. 自信度の評定平均値

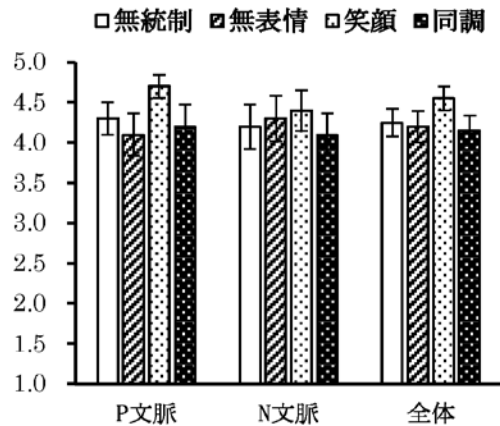


Fig 4. 好感度の評定平均値

(Fig1 ~ 4すべて調査データを元に筆者が作成)

文脈との関連がみられたのは笑顔条件と無表情条件であった。笑顔条件では、ネガティブ文脈に比べポジティブ文脈において有意に平均値が高く ($p = .022$)、逆に、無表情条件ではネガティブ文脈において有意に平均値が高かった ($p = .023$)。また、ポジティブ文脈において、笑顔条件は、無統制条件および無表情条件と比べて有意に平均値が高く ($p = .002, p < .001$)、同調条件と比べても高い傾向がみられた ($p = .090$)。

以上から、とりわけポジティブな文脈では、互いに笑顔で会話することで、話者の話しやすさが促進されることが示唆された。また、ネガティブな文脈においては、ポジティブな文脈の時ほど、無表情によって話者が話しにくさを感じるわけではないことが示唆された。

受容度の評定平均値

結果をFig 2に示す。分散分析によって、表情の主効果はみとめられたが ($F(3,27)=21.833, p < .001, \eta^2 = .840$)、文脈と表情の交互作用はみとめられず ($F(3,27)=.767, p = .522, \eta^2 = .079$)、文脈の主効果もみとめられなかった ($F(1,9)=.375, p = .555, \eta^2 = .040$)。

多重比較の結果、全体を通じては、笑顔条件および同調条件と、無統制条件および無表情条件との間に有意な差がみられた (笑顔>無統制, 笑顔>無表情, 同調>無統制, 同調>無表情, いずれも $p < .001$)。笑顔条件と同調条件の平均値に有意な差はみられず、無統制条件と無表情条件の平均値にも有意な差はみられなかった。

文脈ごとの表情差をみると、ポジティブ文脈において、笑顔条件および同調条件と、無統制条件および無表情条件との間に有意な差がみられ (笑顔>無統制; $p < .001$, 笑顔>無表情; $p < .001$, 同調>無統制; $p = .004$, 同調>無表情; $p < .001$)、ネガティブ文脈においても同様に、笑顔条件および同調条件と、無統制条件および無表情条件との間に有意な差がみられた (笑顔>無統制; $p = .008$, 笑顔>無表情; $p = .007$, 同調>無統制; $p = .038$, 同調>無表情; $p < .012$)。

これらのことから、互いに笑顔や表情同調を意識して会話すると、話者は相手にしっかりと話を聞いてもらえていると感じ、その傾向は、ポジティブな文脈のみならずネガティブな文脈においてもみられることが示唆された。一方、互いに表情を意識しない、または無表情でいると、話者は、相手に話をちゃんと聞いてもらえていないと感じる傾向があることが示唆された。

自信度の評定平均値

結果をFig 3に示す。分散分析を行ったところ、表情の主効果はみとめられたが ($F(3,27)=7.561, p < .001, \eta^2 = .457$)、文脈と表情の交互作用はみとめられず ($F(3,27)=1.030, p = .395, \eta^2 = .103$)、文脈の主効果もみとめられなかった ($F(1,9)=.786, p = .398, \eta^2 = .080$)。

多重比較の結果、全体を通じて、笑顔条件は無統制条件より平均値が高い傾向にあり ($p = .080$)、同調条件は、無統制条件および無表情条件と比べて有意に平均値が高かった ($p = .001, p = .013$)。笑顔条件と同調条件の間に有意な差はみられず、無統制条件と無表情条件の間にも有意な差はみられなかった。

文脈ごとの表情差をみると、ポジティブ文脈において、笑顔条件は、無表情条件より平均値が高い

傾向がみられ ($p = .057$)、同調条件は、無統制条件および無表情条件より有意に平均値が高かった ($p = .019, p = .003$)。

このことから、互いに笑顔や表情同調を意識することで、話者は自信をもって自分の言葉を伝えられると感じること、とりわけポジティブな文脈においては、互いに無表情でいるよりも、笑顔を伴って会話することで、その傾向が促進されやすいことが示唆された。

好感度の評定平均値

結果をFig.4に示す。分散分析の結果、有意な交互作用はみとめられず ($F(3,27) = .522, p = .671, \eta^2 = .055$)、文脈の主効果もみとめられず ($F(1,9) = 1.328, p = .279, \eta^2 = .129$)、表情の主効果もみとめられなかった ($F(3,27) = .933, p = .438, \eta^2 = .094$)。

このことから、英会話トレーニング中における互いの表情は、いかなる文脈においても、互いの好感度には影響しないことが示唆された。

自由記述

自由記述に記入があった質問紙は80枚中44枚であった。そのうちの多くは“Thank you”や“good”など授業への感謝や感想を簡潔に述べたものであったが、自身の会話を振り返り、分析している記述もあった。そうした記述を抜粋してTable 3に示す。

Table 3. 自由記述欄の記述例 (原文のまま)

学生 (国籍)	回	表情	記述内容
A (日本)	1回目	無統制	きんちょうしました～
	2回目	笑顔	発音がむずかしくて、会話になると自分の英語が伝わってるか不安だけど、笑顔で会話してくれて、うれしかったです。あと、楽しかったです。
	4回目	同調	難しかったけど、目を合わせて話せていたのでよかったです!!
	5回目	笑顔	話しやすくてよかったです!
	6回目	無表情	真顔だと、ちょっと、つかれます^^;
	7回目	同調	真似するのむずかしい!でもおもしろかったです!
B (日本)	1回目	無統制	発音 自信ないです。
	2回目	笑顔	SMILEの方が話しやすいと思いました。
	5回目	笑顔	よく笑ってくれるので話しやすかったです。
C (日本)	2回目	笑顔	笑顔で話をきいてもらえるとうれしい。

D (日本)	3回目	無表情	無表情だと怒っているみたいで怖く感じました。
	4回目	同調	今まで表情を意識して英語を話したことはありませんでした。おもしろかったです。
	5回目	笑顔	笑顔がすごく大事だと思いました。英語で話すと、緊張して、なかなか笑顔になれないけど、笑っているうちに話しやすくなるというか。
	7回目	同調	笑顔で会話できてよかった。
	8回目	無統制	目を合わせて話をするのに慣れたかな。自信が出てきた気がします。
F (ベトナム)	1回目	無統制	I enjoy talk. Thank you for that wonderful time and conversation.
	2回目	笑顔	Smile response was good. Thank you.
H (ベトナム)	2回目	笑顔	I feel good to talk! Smile is important!
I (ベトナム)	2回目	笑顔	smile talk is nice!
	4回目	同調	Imitating face is difficult. But it's fun.
J (ネパール)	1回目	無統制	会話は楽しいでした。いつも会話やりたい。
	7回目	同調	Today I learned new words. Thank you for this opportunity.

(調査データを元に筆者が作成)

記述内容を概観すると、初回こそ緊張がみられたものの、全体的には会話を楽しんでいた様子がみとれる。笑顔に関する記述が多く、「話しやすかった」(学生 A・B・D)「うれしかった、よかった」(学生 A・D・F・I)「笑顔が大事」(学生 D・H)という気づきが見られ、笑顔で会話することを肯定的に評価していたようである。特に学生 D の「笑っているうちに話しやすくなる」という記述は、表情による感情統制性、すなわち、笑顔を意識的に表出することで会話中の不安を軽減することができる可能性を示唆している。表情同調については、「難しかったが面白かった」(学生 A・D・I)という意見が見られ、これまで、少なくとも英会話中には、表情同調を意識してこなかったことが読み取れる。無表情については、「つかれた」(学生 A)「怒っているみたいで怖く感じた」(学生 D)との記述があり、無表情をネガティブな感情の表れであると読み取り、会話にマイナスの効果をもたらすものと捉えていたことがうかがえる。

4. 考察

笑顔および表情同調がもたらす心理的效果について

今回の結果から、互いに笑顔を意識して表出する、あるいは相手の表情に同調しながら英会話を行うと、話し手は話しやすく、聴き手に受容されていると感じ、自信をもって発言しやすいという可能

性が示された。

笑顔が会話を促進させることは、種々の先行研究によって証明されている。吉田（2001）は、人が言語情報の真意性を評価するにあたり表情を重視することを見出し、その際、笑顔は相手と円滑にコミュニケーションを進めるための潤滑油の機能を果たすと評している。吉川・中村（2003）は、認知的負荷のかからないような要求や質問において、最も発話を促進しやすいのは笑顔であると述べており、守（2013）は、笑顔と感情の結びつきについて考察し、笑顔が日常会話にプラスの働きをもたらすことを示唆している。

表情の同調に関しても、笑顔と同様、会話を促進させやすいことが明らかとなっている。Ichikawa & Makino（2007）は、相手の表情同調を受けることで、認知者はより表情表出時間が長くなり、コミュニケーションを持続させようとする傾向をもつと述べている。また、表情を意識的に同調させることで、相手の感情と一致した感情を抱く可能性が高まること（Hatfield et al., 1994; Goldman & Sripada, 2005）、ひいては、相手に対する共感のサインとして作用し、親密な関係を築くための働きをもつこと（藤村, 2017）が指摘されている。

今回の結果は、これらの研究が示す知見に準じたものとなった。学習者にとって、ともすれば緊張しがちな英語コミュニケーションにおいて、笑顔や表情同調は、自身にも相手にも心の余裕をもたらし、張り詰めた空気を緩和させ、会話を促進させる働きをもつと推察される。ただし、笑顔は一方で、相手の話を理解したサインとして受け取られやすい。そのため、話を理解できていないのに笑顔を返すことや、文脈を無視した笑顔の表出が、相手の誤解を招く可能性をもつことには十分に留意しなくてはならない。実際の英会話において、どのような表情や非言語媒体が適切とされるか、文脈との関係を鑑みながら、さらに検討していく必要があるだろう。

なお、本研究の結果においては、同調条件の評定値はおおむね笑顔条件と差がなかった。録画映像から鑑みるに、同調条件において、学生は互いに笑顔になっていることが多く、そのためと思われる。すなわち、相手がいったん笑うと、その笑顔に同調して笑顔になり、その笑顔を受けて相手もまた笑う、という笑顔の連鎖が起り、結果として笑顔条件に近い結果が出たようである。表情の同調が、否定的な表情よりも笑顔に対して行われやすいとする指摘は多く（Hinsz & Tomhave, 1991; Bourgeois & Hess, 2008; van der Schalk et al., 2011）、今回の結果においてもこの傾向がみとめられたといえるであろう。

無統制条件と無表情条件の評定結果について

今回の結果より、互いに表情を意識しない、あるいは無表情で会話をする、話し手は話しにくいのみならず、相手がちゃんと話を聴いてくれているか疑問に感じ、自信をもって言葉を発言できないことが示された。

表情認知の研究において、無表情はニュートラル表情（中立な感情を示す表情）として扱われることが多いが、たとえ表出者に特定の感情がなくとも、認知する側は、そこから様々な感情を読み取ろうとする（関・綾部, 2013）。また、無表情は、潜在的にはネガティブな表情として評価されやすいことが指摘されている（Lee et al., 2008）。互いに無表情で会話することで、相手の表情からネガティ

づな感情を読み取り、コミュニケーションが阻害されたとすれば、今回の結果はこれらの知見を支持しているといえる。ネガティブな文脈においては無表情でもさほど話しやすさに影響が出なかった点からも、その傾向がうかがえるだろう。

なお、今回の結果では、無統制条件と無表情条件の評定値に大きな差はみられなかった。本研究における無統制条件とは、表情について特に意識せず、いわば自然な表情で会話するというものであった。一方、無表情条件は、まっすぐに相手を見つめ、顔面筋肉を極力動かさず、感情を伴わずに会話するというものであった。これら両条件の評定値に差がなかったことを受け、録画した表情を確認したところ、無統制条件において、アジア人留学生は比較的こやかに話す者がいた一方で、日本人学生は真顔で話す者が多く、その表情が無表情に酷似していたため、今回の評定結果に至ったものと推察した。

一般的に考えて、クラスメート同士が母国語を使って会話するとき、少なくともポジティブな文脈においては、互いに無表情でいることは少なく、リラックスした表情になり、話が弾めばおのずと笑いもこぼれることであろう。今回、そうした傾向がみられなかった理由は、英会話トレーニングを行うにあたり、学生、とりわけ日本人学生が少なからず緊張していたためと思われる。英語のスピーキングやリスニングに自信がない者は特に、発音や文法にミスがないようにと力むあまり、顔がこわばり、相手を凝視し、結果、無表情に近い表情になることが多いようである。相手のそうした表情を受けて、話者の顔もまたこわばり、互いに話しづらさを感じるに至ったと考えられる。

そうした学習者に表情にまで気を回す余裕はないのかもしれない。しかし、だからこそ、真に必要な場面での英会話を円滑に進めるために、そのトレーニングにおいて、対話者に表情を意識させることには意義があるように感じられた。

互いの表情が互いの好感度に影響しなかったことについて

表情が印象や魅力に与える影響を指摘する研究は多い (Ho et al., 2018; Golle et al., 2014; Garrido & Prada, 2017)。日本人を対象とした研究においても、井上 (2014) は、大学生・社会人を問わず、笑顔からは明るく親切な印象を受けやすいことを明らかにし、益子・斎藤 (2008) は、笑顔および真顔の印象は好感度因子に強く依存していると述べている。

しかし本研究では、これらの知見は当てはまらず、会話中の表情は互いの好感度に影響しないという結果がえられた。その理由としては、受講者数が少数であったため、同じ相手とペアを組む頻度が高かったことや、授業内で話し合う、教え合うといった相互コミュニケーションを交わす機会が多かったことにより、学生同士の印象がすでにある程度形成されていたためと考えられる。

そのため、条件や対象者数を変えての再検討が必要となってくるが、今回の結果のみを鑑みれば、今後の英会話トレーニングを進めるにあたってのメリットも見えてくる。少人数のクラスに限定されるかもしれないが、トレーニング中にいかなる表情を表出しても互いの印象に影響は生じないという保証があれば、学習者は安心してさまざまな表情表出を試すことができ、そのレスポンスを即時的に確かめながら、自分なりの表示規則を見出していくことができるからである。さらに、日本人学習者だけでなく、今回のようにアジア人留学生が授業に加わることで、自文化のみからは発見しえない多

様な表現方法を観察し、新たな理解へとつなげていくことができるのではないだろうか。

5. まとめと展望

日本人学生やアジア人留学生には英語に苦手意識をもつ者が多く、そうした学生でもコミュニケーション力を育成できるような授業活動を目指し、本研究では、英会話トレーニング中の学生の表情表出について検討した。互いに表情を意識せずに話した場合、緊張から顔がこわばることが多く、無表情に近くなり、発言に自信を持てなくなる一方で、笑顔を意識して表出した場合や、相手の表情に同調しながら英会話を行った場合には、話すことへの抵抗が減り、自信をもって発言しやすくなるという傾向がみられた。これらのことから、英語授業において、表情が自他の心理に及ぼす影響を考慮しながらコミュニケーション活動を進めることに意義が見いだされたといえる。また、日本人学生とアジア人留学生が共に学びながら、互いの表現方法や解釈の違いを知り、それらを乗り越えて理解しあおうとする姿勢を見せたことは喜ばしい。

とはいえ、今後の課題は多い。今回は英会話サンプルを用いたトレーニングに留めたが、今後の目標は無論、学生自身が発話内容を考え、発言し、会話を作り上げていくコミュニケーション力の育成を促すことにある。トレーニングを繰り返して発話への抵抗を軽減させ、少しずつ自身の体験や思いについて報告させつつ、その際の非言語要素や表情表出を併せて調べることで、本来の研究目標へと近づくものと思われる。また、本研究は少人数クラスにおいて行われたものであるため、獲得データ数が十分とは言い難く、さらに、大人数においては状況や雰囲気も異なるため、同様の成果が得られるとは言い切れない。これらの点を踏まえながら、実践的な研究を積み重ね、研究方法を洗練させていく必要があるだろう。

文献一覧

- 有本純 (2000). 「英語コミュニケーションにおける心理的障壁を除去する為の方略研究」, 関西国際大学研究紀要, 1, 147-157頁.
- 井口紀子 (2017). 『1から出直し 書き込み式英会話BOOK』, 成美堂出版.
- 磯田貴道 (2009). 「英語でのスピーキングに対する抵抗感の軽減」, JACET Journal, 48, 53-66頁.
- 井上靖子 (2014). 「表情が初対面の相手に与える印象」, 生活科学研究, 36, 183-194頁.
- 宇田晃 (2016). 「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する指導方法 - 「話すこと」に意欲的に取り組む場面設定の工夫 -」, 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告, 14, 7-12頁.
- 川野哲史 (2017). 「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を目指して - コミュニケーションを図る素地・基礎づくりを通して -」, 和歌山県教育センター学びの丘研究員報告書, 2017-7, 1-8頁.
- 関那積・綾部早穂 (2013). 「無表情に対する感情認知」, 筑波大学心理学研究, 46, 1-8頁.
- 瀧澤典子 (2020). 「英語スピーキング能力向上のための指導研究」, 東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校研究紀要, 15, 25-36頁.
- 丹後由香 (2021). 「学びに向かう力を育む外国語教育の一方策 - 外国語を用いて伝え合う楽しさを実感させながら -」, 京都市総合教育センター研究課研究紀要 (令和三年度), 9-32頁.
- 藤村友美 (2017). 「コミュニケーションにおける表情表出の機能的役割」, 生理心理学と精神生理学, 35(1), 3-13頁.
- 益子行弘・斉藤美穂 (2008). 「基本6表情の変化が印象に与える影響」, 日本心理学会第72回大会論文集, 693頁.
- 村松愛美・野中弘敏 (2013). 「対話場面における聴き手の表情の有無が話し手の気分に及ぼす影響: 話し手の性格との関連で」, 山梨学院短期大学研究紀要, 33, 120-127頁.

- 守秀子 (2013). 「笑う門には福来る 表情フィードバック仮説とその実験的検証」, 文化学園長野専門学校研究紀要, 5, 61-66頁.
- 森下朝日 (2020). 「聴き手の表情が発話者の心理に及ぼす影響 - ベトナム人留学生の怒り体験報告時 -」, 日本心理学会第84回大会発表抄録集, 19頁.
- 文部科学省 (2003). 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画の策定について」, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm, 2022年8月1日.
- 横山由佳・足立和美 (2021). 「コミュニケーション能力を育成するための授業づくり～子供の気付きや困り感に着目し、会話を広げる子供の育成を目指して～」, 鳥取大学附属小学校研究紀要 (2021年3月), 89-95頁.
- 吉川左紀子・中村真 (1997). 「顔・表情の違いによる発話行動の調整」, 電子情報通信学会論文誌, 80(8), 1324-1331頁.
- 吉田弘司 (2001). 「顔の表情が会話内容の真意性評価に及ぼす効果」, 比治山大学現代文化学部紀要, 8, 155-161頁.
- 渡邊博司 (2013). 「英語コミュニケーション能力の育成には何が必要か - 日本の英語教育とKLASの教育実践の比較から -」, 明治大学教育会紀要, 5, 41-52頁.
- Bourgeois, P., & Hess, U. (2008). The impact of social context on mimicry. *Biological Psychology*, 77, pp. 343-352.
- Garrido, M. V., & Prada, M. (2017). KDEF-PT: Valence, emotional intensity, familiarity and attractiveness ratings of angry, neutral, and happy faces. *Frontiers in Psychology*, 8, pp. 2181.
- Goldman, A. I., & Sripada, C. S. (2005). Simulationist models of face-based emotion recognition. *Cognition*, 94, pp. 193-213.
- Golle, J., Mast, F. W., & Lobmaier, J. S. (2014). Something to smile about: The interrelationship between attractiveness and emotional expression. *Cognition & Emotion*, 28, pp. 298-310.
- Hatfield, E., Cacioppo, J. T., & Rapson, R. L. (1994). Emotional contagion. NY: Cambridge University Press.
- Hinsz, V. B., & Tomhave, J. A. (1991). Smile and (half) the world smiles with you, frown and you frown alone. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, pp. 586-592.
- Ho, P. K., Woods, A., & Newell, F. N. (2018). Temporal shifts in eye gaze and facial expressions independently contribute to the perceived attractiveness of unfamiliar faces. *Visual Cognition*, 26, pp. 831-852.
- Ichikawa, H., & Makino, J. (2007). Function of congruent facial responses to smiling and frowning. *Perceptual and Motor Skills*, 105, pp. 838-851.
- Lee, E., Kang, J. I., Park, I. H., Kim, J., & An, S. K. (2008). Is a neutral face really evaluated as being emotionally neutral? *Psychiatry Research*, 157, pp. 77-85.
- MacIntyre, P.D., & Gardner, R.C. (1994). The subtle effects of language anxiety on cognitive processing in the second language. *Language Learning*, 44, pp. 283-305.
- Mehrabian, A. (1968). Communication without words. *Psychology Today*, 2, pp.52-55.
- van der Schalk, J., Fischer, A., Doosje, B., Wigboldus, D., Hawk, S., Rotteveel, M., & Hess, U. (2011). Convergent and divergent responses to emotional displays of ingroup and outgroup. *Emotion*, 11, pp. 286-298.

